

教育者宮澤賢治の研究（Ⅲ）

——社会教育的視点から——

森 下 恭 光

緒 言

宮澤賢治の生活の様々な局面において、大きな意味をもって浮上して来るのは、前稿において触れたとおり、彼が青年時代に読み、強烈な感銘を受けたと伝えられる『妙法蓮華経』に展開される大乘的宇宙観、世界観によって支えられた人間観、生活観であった。

それは、当然、教育活動の場面においても濃厚に反映することになった。

『妙法蓮華経』は、全8巻28品から成る大乘經典の一つであるが、その内容が、①宇宙の統一的真理（一乗妙法）、②久遠の人格的生命（久遠釈迦）、③現実の人間の活動（菩薩行道）によって構成されている⁽¹⁾ことを理解したはずの宮澤賢治は、その教理のすべてに重点を置いたわけではなく、③の現実の人間の活動を説いた部分に、つまり、菩薩行道を説いた部分に、とくに感銘を受け、その実践に精力のすべてを費やすかのような構えを見せていたと観察される。この菩薩行道は、彼のばあい具体的には、どのような局面で、どのような形をとって現れているのであろうか。

教育活動の中で、農学校の教師として過ごした4年余りの間に宮澤賢治がいかなる活動をしたかについては、その現象面（事実面）と、それを支える精神面（とくに法華経信仰によって特長づけられる）について、前稿と前々稿において考察したところである。

そこで、本稿においては、彼の他の教育活動について、その現象面とそれを支える精神面について考察したい。

学校教師としての教育活動の他で、教育活動としてとらえることができるのは、文学創作活動（とくに童話の創作）により、作品を通して読者を触発しようとしたことに象徴される活動が、まず、あげられる。

次いで、羅須地人協会という私的な団体を組織し、その会員に対して、明確な教育的意図をもって行なった活動があげられる。

本稿においては、この二つの性質の異なる教育活動について社会教育的視点から考察する。すなわち、彼の社会教育家的な側面について考察する。

—

まず、文学創作活動について以下に検討する。

彼の文学創作の姿勢は、大正十年一月二十三日に故郷を発ち、上京して国柱会本部を訪ねた際に、応待した高知尾智耀から、日蓮主義による信仰の在り方を説かれ、文学者は文学創作活動の中に「信仰の活きた働きが現われてゆかなければならぬ」⁽²⁾との説を聞いたことから、法華文学の創作を志すことを決意したという経緯にあらわれている。

彼自身、後に「高知尾師ノ奨メニヨリ法華文学、創作」⁽³⁾を志すことになったと記してい

ることからも、それは明らかである。

そのような姿勢によって、文学として創作された童話を集めて一本にまとめて出版したのが、大正十三年十二月発行の、イーハトブ童話『注文の多い料理店』と題する童話集である。

『注文の多い料理店』は、彼が世に出した最初の童話集であるためもあってか、その広告ちらしには、単なる宣伝文を越えた創作思想ともいうべきものが表明されている。

彼は、自作の童話集を「作者の心象スケッチの一部である」⁽⁴⁾と性格づけを行なった上で、その特色を4点あげている。

それらは、要約するならば、次のようになる。

1、正しいものの種子を持ち、美しい発芽を待つ。しかも、既成の宗教、道徳の残滓を色あせた仮面によっておい、純真な心意の所有者達（筆者注、少年少女達）に欺き与えようとするものではない。

2、新しい、よりよい世界の構成材料を提供しようとはするが、それは全く作者に未知な絶えざる驚異に値する世界自身の発展であって、畸形に捏ねあげた煤色のユートピアではない。

3、決して偽でも仮空でも窃盗でもない。それはどんなに馬鹿げていても、難解でも、必ず心の深部において万人に共通なものである。

4、田園の新鮮な産物である。田園の風と光との中からつややかな果実や、青い蔬菜と一緒にこれらの心象スケッチを提供するものである。⁽⁵⁾

『注文の多い料理店』に収録されている作品は全部で9篇であり、その題名は次のとおりである。①『どんぐりと山猫』、②『狼森と筑森と盗森』、③『鳥の北斗七星』、④『注文の多い料理店』、⑤『水仙月の四日』、⑥『山男の四月』、⑦『かしはばやしの夜』、⑧『月夜のでんしんばしら』、⑨『鹿踊りのはじまり』。

ところで、『注文の多い料理店』に収録されている9作品は、数と題名においては一定しているが、目次の順序には5種類がある。

ここにあげた順序は、初版本目次によったものであることを断っておきたい。⁽⁶⁾

次に、『注文の多い料理店』と題する童話集の中で、その題名が童話集の名称にもなっている作品、『注文の多い料理店』⁽⁷⁾について、いかにそれが彼の童話集の特色として先にあげている四点を反映しているのかを検討していきたい。

その前に、彼自身が目次に添えているこの作品の説明は次のようになっている。

「二人の青年紳士が狐に出て路を迷い『注文の多い料理店』に入りその途方もない経営者から却って注文されていたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。」⁽⁸⁾

まず、この作品の概要を見ておこう。登場人物は、狐をするためにひどい山奥に迷い込んだ2人の青年紳士とその案内人である専門狐師の3人である。これに加えて、白熊のような狐犬が2頭。さらに、西洋料理店「山猫軒」の山猫2匹と親分といわれる山猫1匹。

以上がこの童話に登場する人物と動物のすべてである。

そこで荒筋であるが、専門狐師の案内で鳥か獣の狐にやって来た青年紳士は、獲物に全然出会わず、何もないような山奥に迷い込む。

落胆して引き返そうとした頃に、山奥に不似合いな西洋料理店に行きつく。驚き、不審に思いながらも西洋料理店に入る2人であるが、扉と扉の裏側に書かれている注文（筆者

注、指示)に従いながら最後の段階にまで到達する。そこで、やっと2人は、自分達が西洋料理を食べるために入った「山猫軒」は、山猫によって西洋料理されて食べられてしまうという意味の西洋料理店で、そこに迷い込んでしまったことに気づき、恐れおののくが、幸い、連れて来た猟犬に救われて、危うく難を逃れるというのが、この童話の概要である。

題名にある注文の多い料理店というのは、本来ならば客が店に対してする注文を、ここでは店が客に対して行ない、それが殊の外に多く、最後の注文の後には、客(二人の青年紳士)は、店の主人(山猫の親分)によって食べられるという仕組みになっていることが終末において客自身によって気かれるという筋になっているわけである。

以上のように筋の概略を記したところで、この作品に示されている作者の意図を次に検討して行く。

まず、本作品は、目次に付された説明にもあるとおり、2人の青年紳士が道に迷ったあげく、西洋料理店にたどり着き、そこで「その途方もない経営者から却って注文されていたはなし」であることには、何ら疑問の余地はないし、誤解の余地はないであろう。それは、たとえ読者を少年少女に限ったところで同様であろう。

しかし、説明の後半にある「糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感」が表現されているとする部分については、疑問が残る。

とくに、読者を少年少女と想定したばあい、読者は、この作品から都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれぬ反感を読みとるであろうか。

このばあい、「都会文明」とは何を指しているのであろうか。山奥に不似合な西洋料理店や、山奥には見かけないイギリス風の青年紳士とその持物(鉄鎧や白熊のような犬など)、さらに、成金趣味を露骨にあらわした言動のすべてであろうか。

たしかに、賢治の故郷をはじめとする山間僻地に生活する子ども達を読者として想定すれば、それらは、すべて「都会文明」を象徴するものであるに違いない。

日常的でないものであるそれらを、山間僻地の子ども達は、「都会文明」とはどのようなものであるかさえ知らないわけであるから、ためらいもなく「都会文明」であると考えても不思議はない。

しかし、賢治は、読者として山間僻地の子どもだけを想定していたのであろうか。

実際にこの作品を読む者として想定される者の中には、「都会文明」に囲まれて生活する少年少女もいるはずである。

そのような「都会文明」に囲まれて生活する子ども達は、「都会文明」の中に居るため、敢えて、「都会文明」を対象化しないはずであり、その結果、「都会文明」を「都会文明」として意識しないはずである。意識しなければ、「都会文明」の存在感そのものが稀薄になるわけで、そのような子ども達にとって、この作品は、どれ程の刺戟を与え得るのであるのか。疑問の残るところである。

また、「都会文明」を意識するような環境の中に生活する少年少女の中で、どれ程の子ども達がこの作品に接するのであるのか。

読まれることのない、目に触れることのない作品は、存在していることさえ認識されないわけで、当然、刺戟を与えることもないから反応も生じないのである。

このように考えると、前提を抜きにして、無条件でこの作品の意図について論ずることには限界があることを知らされる。

また、「放恣な階級」に対する「止むに止まれない反感」という部分については、作者の

抱く階級意識が読者として予想される少年少女に押しつけられているだけなのではないか、との懸念さえ生じさせかねない。

以上は、説明文についての検討であるが、本題の広告ちらしの中にある4つの特色について、それらが、どのようにこの作品に反映しているかの検討に入る。

まず、1にあげられている「正しいものの種子を持ち、美しい発芽を待つ」⁽⁹⁾という特色は、どの部分に反映しているのでしょうか。

作中には、「正しいもの」の象徴といえるものは何も描かれていない。したがって、そのものの種子はないし、その美しい発芽も有り得ない。考えられるのは、「正しいもの」の対極にある邪悪なものとしての「都会文明」と「放恣な階級」に対する「止むに止まれぬ反感」を生み出す正義感こそが「正しいものの種子」であり、それが好ましい形で発揮されることが、「美しい発芽」になるということであろう。

2の特色としてあげられている「作者に未知な絶えざる驚異に値する世界自身の発展」⁽¹⁰⁾としての「よりよい世界の構成材料」⁽¹¹⁾の提供とは、何を指しているのでしょうか。

この作品に描かれている山奥の西洋料理店は、一見すると理想郷のようである。しかし、それはあく迄も外見では、ということであり、実際は、2人の青年紳士が山猫の親分の餌になりかける世界であった。

つまり、理想郷のように見えるということと、実際に理想郷であるということとは全く別のことであるということを示唆することにより、「よりよい世界」とは一体どのような世界であるかを読者に思考させるということがこの作品の意図するところであるように思われる。

ここでも作者は、理想郷そのものを描くのではなく、悲惨で邪悪な世界を描くことによって、その対極にある理想的な世界への志向を読者に促すことを試みていると思われるのである。

「畸形に捏ねあげた煤色のユートピアではない」⁽¹²⁾というのは、「ユートピア」であるように錯覚することがあってはならないと念をおしているということであろう。

3の特色にあげられている「どんなに馬鹿げていても、難解でも、必ず心の深部において万人に共通なものである」⁽¹³⁾というのは、この作品の場の設定が山奥にある西洋料理店であり、「注文が多い」ということが、常識とは逆で、店が客に注文を多くするということが馬鹿げている、つまり、有り得ないことである、その意味において難解であるかも知れないということであろう。

つまり、作者は誤解や不満を予想して予防線を張っているということではないか。

予防線を張ることは、一種の弁解をしていることにもなるが、積極的には、正当な評価を得られるような道筋（読み方）を示しているともいえそうである。

作者宮澤賢治は、この場合、読者に対して、かなり強い誘導を行なっているのである。

「必ず心の深部において万人に共通なものである」⁽¹⁴⁾と書かれていると、もし、共感し、感動をおぼえなかったら、読者は、作者によって「あなたは異邦人である」といわれるに等しい観念に襲われるのではあるまいか。

とにかく、読者としては、「心の深部において」共感するものをおぼえるのが当然ということになるのである。

4に記されている特色は、他の特色に比較すると、最も理解しやすいものである。

「田園の新鮮な産物である」⁽¹⁵⁾ということは、彼が故郷の岩手県を「イーハトブ」⁽¹⁶⁾と

呼び、それは、「ドリームランド」⁽¹⁷⁾であり、「心象中」に実在すると考えたことから、「田園」は当然、岩手県のそれであるだろう。

その岩手県の自然の中に生活する宮澤賢治が作者として、初めて世に問う童話集であるから、彼にとってそれは新鮮であると同時に受け容れる者（読者）にとっても新鮮なものになるであろう。これは、事実がそうであるということよりも、彼の自負心から出たことばとして受け容れるべきものであると考える。

『注文の多い料理店』も、当然、山奥という自然の中にある。この西洋料理店は、田園でこそないが、山奥という自然の中にあるため、その不自然さ、異質さが際立って見えるのである。

異質なものは目立つ、目立つことによって強い印象を与える。そういう西洋料理店であるからこそ、「注文」が客に対する店側の指示であるという異常な事態が、さらにその印象を強めることになるのである。

そういう意味も加えて、確かに、「田園」ではないが、「山奥」という自然の中に立つ西洋料理店の印象は強烈である。

以上のように見て来ると、『注文の多い料理店』は、作者の意図を直接的に、あるいは暗示的に反映していることは間違いのない事実として受け止められる。

このように作者による明確な意図が反映される形になっている童話『注文の多い料理店』は、読者によって理解されるならば、作者の創作意図が理解されたことになるため、作者にとっては満足すべきことであるに違いない。

このような彼の創作姿勢によって生み出された文学を谷川徹三は「賢者の文学」⁽¹⁸⁾として性格づけている。

谷川徹三によれば「賢者の文学」とは、「生活者の文学、実践者の文学」⁽¹⁹⁾というべきものである。「賢者」は、「生活者として健康であると共に、常に道を求めて已まない人でなければならぬ」⁽²⁰⁾が、宮澤賢治にはそれが顕著に見られるというのである。

二

大正十五年三月三十一日、花巻農学校を依願退職した宮澤賢治は、花巻町下根子桜にある別宅で独居自炊の生活を四月には開始している。⁽²¹⁾同所において五月には、レコード・コンサート、子ども会を始めていることから、何事かを始めようとする意志が伺われる。

六月には、『農民芸術概論綱要』を起稿しているが、その内容には、次のような注目すべき⁽²²⁾箇所があり、それにより、彼が始めようとする活動の方向を推測することができる。

序論において、彼は、次のように唱える。

「おれたちはみな農民である　ずいぶん忙しく仕事もつらい／もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい／われらの古い師父たちの中にはそういう人も^{ママ}応々あった／近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい／世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない／中略／正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである／われらは世界のまことの幸福を索ねよう求道すでに道である」⁽²³⁾とある部分を見るだけで、明確に彼の志向するところを知ることができる。

すなわち、彼は、自分自身を農民として規定し、農民として農民と共に生きんとする意

志を固めた者であることを宣言している。

しかも、農民として生きることをただ漫然と行なうのではなく「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」との認識と覚悟で、「世界のまことの幸福を索ねよう」とするのである。重大な覚悟であるわけであるが、ここにすでに『注文の多い料理店』の創作に示された同じ姿勢が垣間見られるのを感じる。すなわち、ここにも『妙法蓮華経』にある菩薩行道の実践が志向されているということである。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」とする認識は、菩薩のそれと同一であるからである。

菩薩(bodhisattva)とは、「自己一人の悟りを求めて修行するのではなく、悟りの真理を携えて現実の中におり立ち、世のため人のために実践(慈悲利他行)し、すすんでは悟りの真理によって現実社会の浄土化(浄仏国土)に努める者のことをいう」⁽²⁴⁾のであることを知るならば、宮澤賢治が『農民芸術概論綱要』の序論に書き、自己の意志表明を行なったその内容は、正しく菩薩への道を進まんとする志を表わしたものであると諒解されるのである。

菩薩は、仏になる前段階であるから、菩薩への道を進むということは、究極の目標(段階)としては仏があるにしても、目下の目標は菩薩であるから、「世のため人のために実践(慈悲利他行)」することが目指されることになる。

さて、農民のために献身せんとする彼の意志は、いよいよ具体化することになる。

大正十五年八月二十三日、羅須地人協会が創立された⁽²⁵⁾のがそれである。

羅須地人協会の「羅須」⁽²⁶⁾が何を意味することばであるかについては定説がない。

堀尾青史によれば、「羅須地人協会は、会則も何もない。農業科学や芸術を講義するところは塾のようであり、各自の製作品や種苗を交換するところは組合のようであり、音楽や劇を楽しむところはクラブのようでもある。入会の資格は働く農民ならだれでもよいし、会費、資料費は一銭もかからない。すべて宮澤賢治というひとりの使命感をもった人物の指導と奉仕による会である。』⁽²⁷⁾ということから察すると、組織としてはその性格を確定し難い性質をもつものであった。この組織がいかなる組織であるかは、活動内容によって、具体的にその性格を検討するのが妥当であろう。

まず、講義では、農民講座における講義があげられる。同年十一月二十九日から開始された農民講座で、彼は、「肥培原理習得上必須ナ物質ノ名称」、「植物ノ生育ニ直接ナ因子」、「土壤要務一覧一岩手県中部地域ニ於テ」と題するテキストを自ら作成し、これを用いて講義した。他に講義の題目を列举すると、「農業に必須ナ化学ノ基礎」、「土壤学要綱」、「植物生理要綱」(上部、下部)、「肥料学要綱」(上部、下部)などがある。芸術に関する講義では、「地人芸術概論」「農民芸術概論」、「農民芸術概論綱要」、「農民芸術の興隆」のテキストを用いている。⁽²⁸⁾

とくに、「農民芸術の興隆」と題するテキストには、彼独特の芸術観が伺われるので、次にその一部を紹介する。「いまわれらにはただ労働が生存があるばかりである」⁽²⁹⁾「芸術はいまわれらを離れ多くはわびしく墮落した」⁽³⁰⁾、「いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである」⁽³¹⁾、「芸術をもてあの灰いろの労働を燃せ」⁽³²⁾。ここに紹介したのは、いわば見出しの部分であり、これらの後に細かい項目が記されている。

羅須地人協会において賢治が行なった講義は、どのような形で展開されたのであろうか。彼の講義を受けた伊藤忠一によれば、それは次のようであった。

昭和二年一月二十日に行なわれた「土壌学要綱」の講義の中で、賢治は、「今日は土壌学です。働く都度必要とする土壌の概念をはっきり知って居ると居ないとでは農業を経営するのにどんなに大きな相違を来すか知れません。極めて短時間に申上げるのですから、限定された土壌学で、岩手県中部地域を標準とする点に置いてわれわれの土壌学でもあります」と述べた。⁽³³⁾

また、昭和二年三月に行なわれた「地人芸術概論」の講義では、賢治は要項だけ黒板に書き、「まだ草案にすぎないからノートしてはいけない」⁽³⁴⁾と断ったという。それでも、取ってメモした伊藤忠一のノートによれば、その内容は、次のようなものであった。

「○真の詩とは…人間の魂の記録で有る。／○詩人とは…常に來たるべき文化の先陣に立つものにして、個人によりて理想異なるもので有る。／○新時代の詩の特徴…健全でなければいけない。(希望、勃興の気持、不正に対する反抗、社会的にして生産的であること。)/○真の詩…生産の原動力であり、これに拠りて勢力をもりかえし労働を完うすることの出来るものでなければならない。」⁽³⁵⁾

その他の活動については、大正十五年十一月二十二日付の案内状によって、その概要を知り得よう。

「冬季製作品分担の協議／製作品、種苗等交換売買の予約／中略／持寄競売…本、絵葉書、楽器、レコード、農具 不要のもの何でも出して下さい。／安かったら引込ませるだけでしょう…」⁽³⁶⁾

レコードについては、彼は、とくに「レコード交換会」を開催した。レコードは、新品で市価の7割以下、雑音明らかなものは5割以下、損傷あるものは3割以下にして売買した。⁽³⁷⁾

「レコード交換会」に出品されたレコードの多くは賢治自身が出品したものであった。

ベートーヴェンの「第七交響楽」、ドボルザークの「新世界交響楽」、ショパンの「マズルカ」、ビゼーの「ラフマニノフ」、ワグナーの「タンホイザー序曲」、等のオーソドックスなものの他に、カラーチェ作曲の「ボレロ」等6枚を市価の半額の6円にしたもの等が含まれていた。⁽³⁸⁾

ところで、羅須地人協会に参加した会員数はどれ位であったのか。

昭和二年二月一日付の岩手日報夕刊三面の羅須地人協会を紹介する記事には、「町内の青年三十余名と共に農村文化の創造に努力し、都市文化に対抗する一大復興運動を起こすのが目的といい、収穫物の物々交換ほか、農民劇、農民音楽を創設し、協会員は家族団欒の生活を行う」⁽³⁹⁾とあるのを考量すると、30名程度の少人数の組織であったことがわかる。

いずれにしても人数的には大きな組織ではなかったが、その組織の主宰者であり、精神的、物質的主柱であったのは、宮澤賢治という花巻の素封家の長男で、農業技術については盛岡高等農林学校で専門教育を受けた上に、花巻の農学校で4年余りに亘って教師を勤めたという人物であったから、特殊な背景と事情を持つ組織であった。

この時期の賢治には、花巻農学校に勤務していた頃と比較すると、その精神生活において、公立学校に勤務する公務員の立場から、私的な組織である羅須地人協会の主催者に立場が変化したことによる解放感と充足感があったであろうことが想像される。

しかし、一方では、勤務する身から、主宰する身になったことによる精神的負担も生じたであろうことも想像される。

そのことの一端を示すものとして、大正十五年に結成された労働農民党と賢治との関係

と、羅須地人協会に参加している会員に対する賢人の配慮という事例をあげることができる。

昭和2年、労働農民党（略して労農党）稗貫支部が二十歳前後の若者達によって結成されているが、その年の春頃「労農党の事務所がなくて困っている」という友人の話を聞いた賢治が「ワシがかりてくる」といって宮沢町の長屋を借りて、その費用も払った上に、羅須地人協会のある家から机や椅子を持って来て貸した、という事実が伝えられている。⁽⁴⁰⁾

ここ迄の尽力をする背景には、賢治の個人的心情の中には、労働農民党に対する強い傾斜があったことが知られる。

しかし、そのことが会員に対する地方社会の特別の視線（社会主義者に対する批判的、排斥的視線）の原因になることを警戒し⁽⁴¹⁾、羅須地人協会は、そういう社会主義者の集団ではないことを地域社会の住民に対して印象させるよう配慮する必要があったということである。

賢治自身が地方社会の住民から如何なる批判や評価を受けようとも、それが、羅須地人協会の会員に直接、間接の影響を及ぼすことになるのは、最も警戒しなければならないことであったからである。

しかし、このような賢治の献身と配慮にもかかわらず、彼を理解し、尊敬し、強い感銘を受けたのは、羅須地人協会の会員に限られていたといわざるを得ないのも事実である。所詮、彼の活動は、「町のお金持の息子のお道楽仕事」⁽⁴²⁾と見なされるようなものであった。しかも、単なる無関心で終わるのならば、彼の活動を抑制する力にはならなかったはずであるが、浄土真宗対日蓮宗という宗派的対立と⁽⁴³⁾、保守的社会における革新的社会思想という対立的要因が加わり、彼の活動には抑制的力さえ外部から加えられたということを考量するならば、羅須地人協会による彼の活動は、彼の意気込みとそれに費やした精力に比例する程までの成果をあげ得たとはいえないであろう。

期待どおりの結果がでなかったという意味においては、成功したとはいえない。

しかし、とも角も彼自身は燃焼し尽した感じを与えながら、この協会の活動は昭和三年八月に終息したのであった。

結言

本稿において考察の対象としたのは、宮沢賢治が、その教育活動の中で、文学創作活動を通して、彼の作品の読者に対して行なった教育活動の特質と羅須地人協会という名称の私的団体において行なった教育活動の特質である。

特質は現象面（事実面）と精神面（思想面）にわたって考察した。その結果、明らかになったことは、次の点である。

まず、文学創作活動について見るならば、現象面（事実面）の特質としては、「心象のスケッチ」と自身も性格づけをしているように、抽象的・象徴的であることが指摘される。

このことは、いかに短文であっても、その含意するところが多く、多種多様な読み方（意味のとらえ方）を可能にするとはいえるが、一方では難解であるとの印象を与えることにもなっている。

精神面（思想面）の特質としては、その根底に宗教的（とくに法華経的）世界観があり、その中心にあるのが菩薩行道としての文学創作という姿勢であることが指摘される。

菩薩行道とは、自利利他を矛盾なく追究する道であるから、文学創作活動を通して宮澤賢治は自利（自己救済）を追究し、その読者に作品世界を享受させることにより利他をはかるという構造になる。

谷川徹三が彼の文学を評して「賢者の文学」と呼ぶのは、そのことを指していると考えられる。

次に、羅須地人協会における活動について見るならば、現象面（事実面）の特質としては、花巻という地域社会において私的に組織された小さな学習・生活社会であったことが指摘されよう。しかも、その社会は、地域社会に深く根をおろして、堅固な地盤を持つ社会ではなく、地域から隔離された小さな理想社会という性質を具えていた。

精神面（思想面）の特質としては、ここにおいても、その根底に宗教的（とくに法華経的）世界観があり、その根本思想の一部としての菩薩行道の思想が見られる。

農民の幸福を願い、自らもひとりの農民として生きることが農民全体の幸福を実現する本となると考えたのである。羅須地人協会における彼の活動は、良き農民として生きる活動そのものであると自己認識されていたはずである。

以上のことから、宮澤賢治においては、文学創作も、羅須地人協会における活動も究極において教育活動に連なるものであったといえる。

注

- (1) 中村元他編、岩波仏教辞典、1996年、733ページ。
- (2) 宮澤賢治、校本宮澤賢治全集、第十四卷所収、昭和60年、536ページ。
- (3) 宮澤賢治、新校本 宮澤賢治全集、第十三卷（上）（本文篇）所収、1997年、563ページ。
- (4) 宮澤賢治、新教本 宮澤賢治全集、第十二卷（校異篇）所収、1995年、10ページ。
- (5) 同前書、10～11ページ。
- (6) 同前書、14ページ。
- (7) 宮澤賢治、新校本、宮澤賢治全集第十二卷（本文篇）所収、1995年、28～37ページ。
- (8) 同前全集、第十二卷（校異篇）所収、1995年、11～12ページ。
- (9) 同前書、10ページ。
- (10) 同前書、11ページ。
- (11) 同前書、11ページ。
- (12) 同前書、11ページ。
- (13) 同前書、11ページ。
- (14) 同前書、11ページ。
- (15) 同前書、11ページ。
- (16) 同前書、10ページ。
- (17) 同前書、10ページ。
- (18) 谷川徹三、宮澤賢治の世界、1989年、24ページ。
- (19) 同前書、24ページ。
- (20) 同前書、25ページ。
- (21) 板谷栄城、素顔の宮澤賢治、1994年、182ページ。
- (22) 宮澤賢治、校本宮澤賢治全集、第十四卷所収、昭和60年、595ページ。
- (23) 宮澤賢治、新校本宮澤賢治全集、第十三卷（上）（本文篇）所収、1997年、9ページ。
- (24) 中村元他編、岩波仏教辞典、1996年、734ページ。
- (25) 宮澤賢治、校本宮澤賢治全集、第十四卷所収、昭和60年、596ページ。

- (26) 堀尾青史, 年譜宮澤賢治伝, 1991年, 310ページ。
- (27) 同前書, 311ページ。
- (28) 同前書, 314ページ。
- (29) 宮澤賢治, 新校本, 宮澤賢治全集, 第十三卷(上)(本文篇), 所収, 1997年, 17ページ。
- (30) 同前書, 18ページ。
- (31) 同前書, 18ページ。
- (32) 同前書, 19ページ。
- (33) 宮澤賢治, 校本宮澤賢治全集第十四卷所収, 昭和60年, 614ページ。
- (34) 同前書, 617ページ。
- (35) 同前書, 617～618ページ。
- (36) 宮澤賢治, 校本宮澤賢治全集, 第十二卷(下)所収, 昭和60年, 168ページ。
- (37) 同前書, 171ページ。
- (38) 同前書, 172～173ページ。
- (39) 宮澤賢治, 校本宮澤賢治全集, 第十四卷所収, 昭和60年, 614ページ。
- (40) 同前書, 609ページ。
- (41) 青江舜二郎, 宮澤賢治, 昭和49年, 161ページ。
- (42) 板谷栄城, 素顔の宮澤賢治, 1994年, 185ページ。
- (43) 同前書, 184～185ページ。

※用いた全集は, すべて筑摩書房刊行のものである。

追記：引用文中の旧漢字, 旧仮名づかいは新漢字, 新仮名づかいに改めたことを断わっておきたい。